

## 【寄稿文】新型コロナウイルス感染が小康を得て

厚別福音キリスト教会

吉田浩二

新型コロナウイルス感染が一山を越え、小康状態を保っている昨今ですが、私はこの期に今回の出来事をしっかり検証し、今後再び襲ってくると思われる第二波に備える必要があることを感じています。

ちなみに私は、現職は厚別福音キリスト教会の牧師ですが、牧師になる前は公衆衛生医として保健所に勤めていました。感染症対策が専門というわけではありませんでしたが、疫学や公衆衛生を生業としていた者として、皆様に少しでも有益な情報を提供できればという思いから、今回感染対策窓口を通じてこの寄稿文を JECA 諸教会に送らせていただきます。少し長い文章になりましたが、お読みいただければ感謝です。

### 1 感染の経過を振り返る

厚生労働省から発表されている新規陽性者数のグラフにこれまでに講じて来られた感染対策を貼り付けて、その関連性を考察しました。(添付図参照)

まず行政的な施策について振り返ると、全国に先駆けて北海道で感染が拡大し、2月28日に北海道知事が独自の緊急事態宣言を発しました。それに続いて首相の判断により3月2日から小中学校の全国一斉休校が始まりました。3月9日に中国・韓国からの入国が制限され、3月21日にはヨーロッパ、3月26日にはアメリカからの入国も制限されました。この頃から東京における感染爆発が懸念される状況となり、3月25日に東京都知事が外出自粛を要請しましたが、政府が東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、大阪府、兵庫県、福岡県に緊急事態宣言を発令したのは4月7日でした。これを受けて各地の商業施設の休業が目立つようになり、4月16日には緊急事態宣言が全国に拡大されました。そして4月中旬頃から「人と人との接触を8割抑えるべき」と声高に叫ばれるようになり、5月の大型連休の人出は実際非常に減少しました。新規陽性者数は4月中旬以降緩やかに減少し、5月14日には39県における緊急事態宣言が解除され、5月25日には全国で解除されました。

JECA においては、4月2日に全国運営委員会の下に新型コロナウイルス感染対策窓口が設置され、4月5日に第1回アンケートが行われ、その時点でアンケートに回答のあった98教会のうち会堂での礼拝が実施されている教会は70教会(71.4%)でしたが、2週間後に行われた第2回アンケートでは、99教会のうち会堂での礼拝が実施されている教会は45教会(45.5%)でした。意図したわけではありませんが、第1回は政府の緊急事態宣言が発令される直前の状況、第2回は全国で外出自粛のムードが最も高まっていた時期を捉えたこととなります。

さて、これらの出来事と新規陽性者の推移を比較してみると、3月末から感染者数は急速に増加し、4月9日の一日708人をピークとして減少に転じます。一見すると4月7日に政府が7都府県に緊急事態宣言を発令し、4月10日から感染者数は減少に転じていますから、

政府の緊急事態宣言が効を奏したように見えなくもありませんが、新型コロナウイルスの潜伏期間は2週間程度といわれており、施策の効果は2週間くらいのタイムラグを含めて判断しなければなりません。そうすると、実は政府が緊急事態宣言を発令した時点ではすでに感染のピークは過ぎていたこととなります。では感染がピークを迎える2週間前に何が行われていたかと振り返ると、ヨーロッパやアメリカからの入国を制限していたことがわかります。つまり、中国・韓国からの入国を制限しても、それだけでは感染を食い止める効果は十分ではありませんでしたが、欧米からの入国も制限することにより、感染はピークを越えていたのです。

一方、緊急事態宣言により商業施設が休業し始めたのは4月上旬であり、更に「接触8割減」が声高に叫ばれて、人出が目に見えて減少したのは4月中旬から下旬です。これをこの新規陽性者のグラフと照らし合わせると、一見人の接触が減るのに合わせて感染者が減っているように見えますが、先に述べた通り2週間のタイムラグを含めて見ると、「国民全体が外出を自粛したから感染が治まったのだ」とは、必ずしも言えないように思われます。

もっと言えば、4月中旬からの国民全体の外出自粛は実際かなり徹底されていたと思いますから、もし本当に国民全体の外出自粛に感染防止の効果があったのであれば、5月中旬には感染者はほぼゼロになって然るべきですが、そうになっていないことから、国民全体の外出自粛による感染防止効果はあくまでも限定されたものであるような気がします。

私はこれらの経過から考えれば、国民全体が人との接触をここまで自粛する必要はなかったのではないかと思います。集団感染を起こしたライブハウスやスポーツジム、また若者たちが屯<sup>たむろ</sup>するような集まりなど、感染のリスクの高い場所を特定して自粛や休業を要請する必要はあったと思います。しかし、国民全体がここまで外出を自粛する必要が本当にあったのかは疑問です。そういう意味で、私は基本的には教会の礼拝を休止する必要はなかったと考えています。これは礼拝を休止した教会を非難しているのではなく、今回の出来事を一度先入観を取り払って、しっかり検証する必要があるということをお願いしたいのです。

## 2 教会の社会的責任とは

今回、多くの教会で礼拝に会衆が集まることを止めることになった理由として、行政から外出自粛を要請されていることに応じることが教会の社会的責任であるという考え方があったと思います。そこで、この「社会的責任」ということについて少し考察したいと思います。

確かに行政からの要請に応じることが、社会の一員としての責務と言えるかもしれません。しかし、ここでいくつかのことを考慮する必要があると思います。まず、今回の要請の目的は新型コロナウイルスの感染防止ということでしたが、果たしてその要請が感染防止に関して妥当性のあるものなのかという点です。つまり、もし教会が礼拝を休止することによって感染防止に寄与していたのであれば、その要請に応じたことは「社会的責任を果たした」と言えますが、前項で考察したことからすれば、教会が礼拝を休止したことは、感染が収束に向かうことに寄与したとは思われません。

しかしもう一つ考慮すべきこととして、近隣への配慮と言うことがあるかもしれません。

今回のコロナ禍における一つの社会現象として、「自粛警察」の動きがありました。つまり、一般市民が他人の行動を監視して、自粛に応じていない様子が見られた場合に、それを非難するという動きです。日曜日に人が集まっているのを見て、近所の人はどう思うだろうか、それが証になるのだろうかと心配する人がいたかもしれません。しかし、周囲から非難されないように配慮して礼拝を休止することが、果たして社会的責任を果たすことになるのでしょうか。もし周囲との軋轢を避けることが社会的責任を果たすことなら、戦時中に皇居遙拝を強要された教会がそれを受け入れることも、社会的責任を果たすためにやむを得なかったことになりはしないでしょうか。

私はむしろ今回のようなコロナ禍に際して教会が果たすべき社会的責任は、感染に対処する術をもって礼拝を継続することにより、社会に範を示すことなのではないかと考えています。

### 3 ハンセン病の歴史から学ぶ

私が感染症の歴史とキリスト教の関係でしっかり向き合わなければならないと感じているのは、ハンセン病の歴史です。クリスチャンのハンセン病専門医であった光田健輔はハンセン病の隔離政策を推進しました。そしてその弟子でありクリスチャンであった女医小川正子は、「無癩県運動」のかけ声の下に家族のもとでひっそりと暮らしていた各地のハンセン病患者を訪ね歩き、療養所への収容に邁進したのです。小川がその様子を描いた「小島の春」を出版すると、ベストセラーとなって民衆の喝采を浴びました。彼女の熱心は邪心のない純粋なものであったと思いますが、結果的に計り知れない人権侵害に加担することになってしまったのです。

ハンセン病の対策と新型コロナウイルスの対策では全く違うではないかと言われるかもしれませんが、もちろんハンセン病対策と新型コロナウイルス対策の違いは数え上げれば切りがありません。しかし一つ共通することは、「感染症への恐怖から生じる過剰反応」ということです。ハンセン病の場合、この「無癩県運動」が行われるようになった時代にはすでにハンセン病は感染症ではあるがその感染力は弱く、隔離する必要はないというのが世界の趨勢でした。しかし我が国ではその病気の恐ろしさ（それは表面的な容貌の変化に依るものと思われれます）が執拗に強調され、社会の中から排除することこそが国家にとっての善であると啓蒙されました。そして、今から考えればそのような必要は全く無かったにも関わらず、患者が出た家はこれ見よがしに消毒され、また入所した患者に対して医師や看護婦は厳重な防護服に身を固めて接したのです。その根底にある感情は「ハンセン病は怖い感染症だ」という思い込みでした。

今回のコロナ禍に際して、社会を席卷したのは「コロナは怖い」という感情だったのではないのでしょうか。それはマスメディアの影響も非常に大きいと思います。「コロナは怖い」一旦そう思い込んでしまうと、何を言われても「怖い」という感情から逃れることが出来なくなってしまいます。牧師たちの中にも、「自分は大丈夫だと思うけど、『危ないから止めてほ

しい』と言われているのに礼拝を続けて、もし万が一感染が起こってしまったら大変なことになる」という恐怖心に支配されてしまった人たちが少なくないのではないのでしょうか。専門家が恐怖を煽り、民衆がそれに呼応するという構造は、ハンセン病の歴史ととてもよく似ていると思います。

そのような中で、長年青森県のらい療養所の園長としてハンセン病医療に関わった専門医でありクリスチャンである荒川巖先生が、こういう文章を書いています。

「今、平和の使徒として」

日本よ。日本人よ。目覚めて悔い改め、命を受けよ。…明治政府が始めた天皇を神とする国体は、日本を亡国に導く無責任体制であることが、彼の十五年戦争で明白となった。全能者でない者を神とするところに、判断の狂いとそれに続く亡びへの道がある。人は全能者から離れると、亡びの道に落ちるしかない。歴史を通して裁き給う全能者を畏れるところに、国の進むべき道が示され、希望への歩みが生れる。

日本の理想とは何か。日本の使命とは何か。世界の民と互いを尊敬し合い愛し合い、支え合って平和の世界を築くことではないか。…

全能者を賛美し、全能者に祈り、支え合う社会を建設しなければならない。…福音の力によりそれは可能となる。(…の部分は省略)

これは小林慧子著「ハンセン病者の軌跡」(同成社)に掲載されたものです。私はこれを読んで、深く胸を刺されました。これは2006年に89歳であった荒川先生が語った言葉ですが、コロナ禍に動揺する現代への叱咤激励として私は受け取りました。「全能者でない者」というと「偶像」を思い浮かべる人が多いかと思いますが、「新型コロナウイルス」も「全能者でない者」にすぎません。しかしその「新型コロナウイルス」を恐れて、礼拝に集まることを止めてしまうということは、「全能者でない者を神とする」ことに、結果的になっているのではないのでしょうか。新型コロナウイルス感染が蔓延し、社会が動揺しているときに、ウイルスを恐れるのではなく、「全能者なる神」を畏れて共に集い、主を賛美し、礼拝することが、世に福音を宣べ伝えることになるのではないのでしょうか。私は今回のコロナ禍にあつて、ハンセン病の歴史に今一度目を留め、そこから学ぶべきことがあるのではないかと感じています。

#### 4 みことばからの証

ここで私の個人的な証をさせていただきます。2月末、北海道知事から「緊急事態宣言」が発表され、いくつかの教会では礼拝を中止したという情報が入る中、正直私も動揺しました。その日、礼拝後に臨時役員会が行われることになっていました。役員会に対してどのように説明したらいいだろうか。そのように思案していた時、心に示されたみことばはヘブル10:25「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか」でした。新改訳2017

を開くと、「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう」でしたが、私の心に迫ってきたのは、馴染みのある第三版のことばでした。そこで私は腹を括りました。そうだ、たとえどんなことがあってもいっしょに集まるのを止めないで、礼拝だけは続けよう。それから私の頭は、「礼拝は止めない。しかし、そのためにはどうしたらいいか」ということだけを考えてきました。

次に私の心に浮かんだのは、創世記 1:28「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」の文化命令でした。「地を治める」ことの中には、「感染症を治める」ことも含まれていると思います。私たちは神様からこの地上にあって感染症を正しく治めることを委ねられているのです。感染する恐れがあるからと言って礼拝に人が集まることを止めてしまうことが、果たして感染症を正しく治めていることになるのでしょうか。むしろ、このような感染症が蔓延する中で、教会がどうやったら共に集って主を礼拝し、福音を宣教し続けることができるのかを真剣に考え、苦闘し、試行錯誤することが、私たちに与えられた使命なのではないでしょうか。

最後に、現在行っているイザヤ書の講解説教の中で、イザヤ書 45:6-7 のみことばに心が捉えられました。「わたしが【主】である。ほかにはいない。わたしは光を造り出し、闇を創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは【主】、これらすべてを行う者。」全能なる主は、新型コロナウイルスをも支配しておられる主です。私はそのことに気がついた時、本当に恐れから解放されました。私たちはウイルスを恐れるのではなく、禍をも造り、支配しておられる主を畏れるべきではないでしょうか。

## 5 第二波に備える

私は今回の新型コロナウイルス感染の第一波は、神様から与えられた練習問題だと思っています。今回は、感染力は強いけれども毒性はそれほど強くないウイルスでした。しかし過去のインフルエンザの大流行の経験などから、今年の秋には第二波が来るであろうこと、第二波はより若年層に感染が拡がり、また毒性はもっと強いかもしれないなどの予想がされています。今は休戦期間です。今のうちに、第二波の備えをしておかなければなりません。今回の経験で多くの教会がインターネットの対応を学んだと思います。しかし、第二波の時は、インターネットに切り替えられるからそれでいいということではなく、どのようにしたらインターネットでの配信をしつつ、会堂での礼拝を継続できるかを探っていけるように、そのために今の休戦期間を有効に用いてどのような備えをすべきなのかについて考えてみたいと思います。

### (1) 学習する

今回はあまり情報がなかったので会堂での礼拝を休止した教会も、十分な情報があれば、第二波が来たとしても、しっかりした感染防止対策を施した上で礼拝を継続することができ

ると思います。そのためには、まず教職の皆さんを始め、各教会でも新型コロナウイルス感染について学習をしてくださるよう、お願いいたします。本寄稿文も参考にいただければ幸いです。教会内でシェアするために、この一部を引用していただいても構いません。

## (2) 感染防止対策を整える

次の項目について、それぞれの教会の状況を確認し、改善できることは今のうちに改善してください。この通りにできなくても、その目的に叶っていれば、それぞれの教会に合うやり方で結構です。

### ①会堂に来た人が、まず手を洗うことができるように。

洗面所への導線が分かりやすいように、表示などを工夫してください。初めて来た人でも、戸惑いや遠慮なく洗面所に行けるような工夫をしてください。

洗剤は、必ずしも殺菌効果にこだわることなく、通常の手洗い用洗剤で構いません。要はしっかり手を洗うことが肝要です。

共用のタオルは置かないで、ペーパータオルを用意してください。台の上に置くだけだと、手の滴が落ちて未使用のペーパーも汚れてしまいますので、できればケースを壁に固定するなどして、他のペーパーを汚さないような工夫をしてください。

手の指で回すような通常の蛇口だと、始めに蛇口を回す際にウイルスが付着してしまい、せっかく手を洗っても、蛇口を締める時に再びウイルスが手に付いてしまう恐れがあります。できれば手の甲で開けることのできるレバー式の蛇口にしてください。簡易な方法としては、通常の蛇口に取り付けることのできるレバーが介護用品として売っているようです。

☆手指消毒用のアルコール剤がなかなか手に入りにくいようです。手を洗った後に、アルコール剤があればそれを使うに越したことはありませんが、手洗いがしっかりされていれば、必ずしも手指消毒にこだわる必要はありません。逆に消毒剤を過信して、手洗いがおろそかにならないようご注意ください。

### ②トイレの掃除を徹底してください

最近の報道によると、集団感染を起こしたクルーズ船のウイルス検査の結果、トイレの便器や床に多くのウイルスが検出されたこと、また展示会やライブハウスでのクラスターでは男女のお客がいたにも関わらず、感染者が展示会では男性に、ライブハウスでは女性に極端に偏っていたことから、トイレで感染した可能性が高いことが指摘されています。考えてみると、もし教会に感染者がいたとしたら、最もウイルスがたくさん存在するのはトイレかもしれません。

そこで教会での感染防止対策として、改めてトイレの掃除を徹底してください。便器と床を小まめに拭いてください。通常のトイレ掃除用使い捨てシートで構いません。それと盲点は水を流す取っ手とドアです。ここも除菌シート（あるいは消毒用アルコール等を付けたティッシュなど）でしっかり拭いてください。

また水を流すことによってウイルスが飛散することも分かっていますので、「飛散防止のため、水を流す前に便器の蓋をしてください」というような表示をして、蓋を閉めることを徹底していただけるとよろしいと思います。

### ③複数の人が触る機器に注意してください

病院の集団感染の原因が、複数の人が使うパソコンのキーボードだった例がありました。教会では音響機器やプロジェクターの操作を複数の人が入れ替わり行う場合があると思います。機器自体の消毒はなかなか難しいと思います。操作する人の手にウイルスが付かないように、操作の前後に手洗いをしっかりとるか、機器の近くにアルコール消毒剤あるいは除菌シートを置いて操作前後に手を消毒するか、それでも気になるのであれば使い捨ての手袋を使うとか、それぞれの教会の状況に応じて工夫してください。大切なことは、こうした機器はウイルスに汚染されている危険性があるという認識を持つことです。

### ④会堂の消毒について

会堂全体を消毒する必要はありません。常識的なレベルで、しっかり掃除をすれば大丈夫です。多くの人に触れるドアノブや手すりだけは、消毒用アルコールがあればそれを噴霧してきれいに拭き取るようにしてください。市販の漂白剤を薄めて使うという方法もありますが、よくわかっている人でないと取り扱いが難しいので、通常の濡れティッシュで拭くだけでもよろしいと思います。

### ⑤会堂の空気環境について

空気清浄機を設置するかどうか議論になることがありますが、よほど高性能の空気清浄機であれば別ですが、通常の空気清浄機があつたとしても、換気はした方がいいと思います。であればむしろ、新たに空気清浄機を設置するよりも、換気をした方がいいでしょう。エアコンは室内の空気を取り入れて熱を奪うシステムですから、エアコンを使っても、換気は必要です。夏の暑い時期にエアコンで室内を冷やしながらどうやって換気をしたらよいか、それぞれの教会で工夫してください。

なお、賛美をすると飛沫が飛ぶから心配という人もいますが、マスクをして普通の声で賛美することに、問題はなりません。念のために、起立はせずに歌う方がいいかもしれません。むしろ、声を張り上げることを避けるために、奏楽者が可能であれば、キーを下げて歌うことは効果的だと思います。賛美リーダーが会衆に向かって立つことは、当面避けた方がいい

でしょう。

#### ⑥聖餐式のやり方について

聖餐式は、それぞれの教会でやり方が異なります。一つのグラスで回し飲みしている場合は、個別のカップにした方がいいでしょう。

パンについては、私たちの教会では、私が使い捨ての手袋を付けて、一つのパンを会衆のしている前で割り、更に一人分ずつ私が割いて手渡しています。あらかじめカットしている場合は、カットする人が手袋を付けて、各人がトレイから自分で取るようにすれば問題ないでしょう。

いずれにせよ、ウイルス感染が広がっていたとしても、何らかの工夫をすれば、聖餐式は行なえると思います。

#### ⑦マスクを備蓄する

一般的には、かなりマスクは出回るようになってきましたので、マスクが手に入らなくて困っている人はあまりいないかと思いますが、ついうっかりマスクを忘れてきた人が「マスクが無いので入り辛い」ということにならないように、教会として、マスクを備蓄しておいた方がいいと思います。「必要な方はお使いください」とマスクが置いてあると、さりげなく思いやりを伝えることにもなります。

#### (3) インフルエンザのワクチンを受ける

もう一つ、第二波への備えとして皆さんにお願いしたいことは、今秋は皆さんインフルエンザのワクチンを受けていただきたいということです。その理由は二つあります。第一に、インフルエンザと新型コロナウイルスは紛らわしいということです。例年秋から冬にかけてインフルエンザが流行しますが、もし今秋誰かがインフルエンザに罹患してしまうと、コロナではないかと懸念されたり、インフルエンザの診断がついたとしても、コロナとの兼ね合いで対応に苦慮することが予想されます。ですから、教会の皆さんに「今年インフルエンザワクチンを受けましょう」と早いうちから呼びかけておいてほしいのです。

もう一つの理由は、インフルエンザワクチンを受けることによって新型コロナウイルスにも感染しにくくなる可能性があるからです。インフルエンザと新型コロナウイルスは別のウイルスですから、インフルエンザワクチンは関係ないと思われるかもしれませんが、それがまんざら関係ないわけでもないのです。インフルエンザのワクチンを打つと、体内で免疫機能が高まります。産生される抗体はインフルエンザウイルスに対するものですが、その特定の抗体だけでなく、その他の異物に対する免疫反応もよく働くようになるのです。これを「交叉免疫」と言います。

私はここ10年以上、インフルエンザワクチンを毎年受けています。そしてその間、風邪



をひいたのは2回くらいしか覚えがありません。しかも熱はほとんど出ませんでした。これがすべてインフルエンザワクチンのおかげだとは言いませんが、交叉免疫が効を奏しているという実感はあります。ただし、「インフルエンザワクチンが新型コロナウイルスにも効く」というような誤解はなさないようにしてください。あくまでも「交叉免疫」が期待できるというだけです。

またインフルエンザワクチンについては、集団免疫の効果はないとか、あるいは重篤な副作用があるので受けない方がよいという主張があることは承知しています。確かに副作用がないわけではありません。しかしワクチンはそれによって得られる効果が副作用のリスクを遥かに上回っていると判断される場合に正当化されるわけで、今回は副作用のリスクを承知の上で受けるだけの価値はあると私は思います。

最後までお読みいただき、感謝いたします。ご質問などありましたら、遠慮なくお寄せください。メール [kjysd19741215@ezweb.ne.jp](mailto:kjysd19741215@ezweb.ne.jp) による質問が一番助かりますが、教会宛の電話 011-982-8710 でも結構です。それぞれの教会において、今後襲ってくると思われる新型コロナウイルス感染第二波に、適切な対処が為されることを念願しています。

在 主